

7月の学習会の案内

平成26年7月22日

いよいよ夏休みに入りました。夏休みに入る前に案内を出すべきでしたが、例によって遅くなってしまい大変申し訳ありません。

先月の案内ではサッカーのワールドカップの話をこの場で書かせてもらいましたが、日本代表の戦いは、残念ながらあっという間に終わってしまいました。私自身は日本の敗退が決まって以降、ほとんどテレビ中継は見ませんでした。クラスの子どもたちは、興味関心が持続していて、毎日どこが勝ったとか誰が得点を決めたといった話題が決勝まで続きました。私にとって、初めてワールドカップを見た記憶が残っているのは、90年のイタリア大会で高校生の時でした。さかのぼって小学生の頃のことを考えると、そんな大会があるとは知るすべもなかったと思います。そう考えると今の子どもたちは、ずいぶん世界のサッカーが身近になったものです。90年のイタリアの小学生は間違いなく、ワールドカップの話題で盛り上がり将来の夢を膨らませたことでしょう。20年が過ぎて日本もそのレベルに近づいてきています。今回は残念でしたが、悲観することなくこれからを楽しみにしたいですね。

さて、7月の語る会ですが、先月に引き続き、「鳥獣戯画を読む」を取り上げていきます。教材研究を受けての授業化について、みんなで話し合っていければと考えています。ぜひ、ご参加ください。お待ちしております。

日 時	平成26年7月26日(土) 9:30~12:00
場 所	岡山大学教育学部附属小学校 <u>教師教育開発センター東山ランチ2F 授業研究室</u> ※部屋の名前が変わりましたが、同じ場所です。 TEL(086)272-0511 FAX(086)271-3455
連絡先	小出 真規(こいで まさき) TEL 090-5704-7339 m-koide@okayama-u.ac.jp (学校パソコン)
内 容	「鳥獣戯画」を読む(第6学年 光村図書) 先月の教材研究を受けて、授業化へ向けた話し合い

<お知らせ>

※「おもしろ見つけ」の本を、附属小でお取り扱いしております! 来られる前に冊数をご連絡ください。代金引換となります。(特価!) 多くの方に手にとっていただけるように、みなさん! 宣伝活動がんばりましょう!

※ 駐車場について

駐車場は「教師教育開発センター 東山ランチ」です。「実践センター」という呼び方がかつてしていたところで、学校の南西にある建物です。よろしくお願ひします。わかりにくいようでしたら、当日朝、小出の携帯にご連絡いただければと思います。

※今年度の**年会費2,000円**を集めます。よろしくお願ひします。

(やめられたり休会される場合は一声かけてくださるとありがたいです。また、会員の先生方の異動情報をおもちでしたら、教えてくださると助かります。)

6月の語る会の報告

文責 小出

○田中先生より

土曜日の長崎で西日本集会が行われた。主催者ががんばっていた。長崎は島嶼部が多い。学会員も少ない。100人も集まらないかもしれないということで勧誘をがんばられていた。結果300人以上。過去有数の盛会。

指定討論者として入った分科会は、水戸部さん、富山さん、二人が来られた。書くこと、読むことの組み合わせ型だった。

単元デザインの話になるが、文章を書くということを単元の頭にもってきて、参考となる鳥獣戯画を読んでという展開。推薦文を書こうとする単元。学級に掲示しようとするいくつかの絵の中から、自分が推したい絵について推薦文を書いてください、という内容。

鳥獣戯画は推薦文ではない。鳥獣戯画を使うことが推薦文を書くことを学んでいるとなると学習者はどう思うか。誤った認識にならないか。その実践で、書かれた推薦文は、いい文章ではあるが、学級のこととからめての言及が全くない。学級と絵のマッチングについて書かれていない。鑑賞文としてはあり。

「単元を貫く言語活動」はどこにいったのか。提案はそうだが、やっていることは違う。「単元を・・・」の普及の過程にこうしたことが見られている。「単元を貫く言語活動」自体は妥当。学習者の中でつながっていればそれでよい。貫くという形を合わせようとする、内容がまちがったことになってしまう。

岡山でも再来年に西日本集会が開かれる予定。ぜひ、日本国語教育学会の会員の先生方を今より20人は増やしたい。できれば、50人以上。

(みなさまよろしく申し上げます。)

○小川先生

西日本集会については、内容(発表)と運営をこの会が担わないといけない。毎月の冊子は役に立つ。ぜひ、多くの先生方に入ってもらえれば。

鳥獣戯画について

かつての中国大会での発表で、「随筆を書こう」という形での提案を検討した先生がおられた。提案内容に表現過程をもってこられたが、鳥獣戯画をどうとらえたかということがまずはないといけないということで、大幅修正をした。自分の見方考え方についての小学生なりの気づきがあって、文章に生かされる。

説明文が変わってきている。鳥獣戯画とか、動いて考えてまた動く、生き物は円柱形などの系統を見ていると書き手が強く出てきている。そのことによって、見方考え方を出す。小学生に何を提示するかは難しいが可能。批判的に読むということの小学校バージョンが出てくる。賛否があるが、強く出てきているというのが現状。書き手が出てくるということが大きな柱になってきている。

学生が学校ボランティアで行っている学校でおもしろ見つけを見た。原点に戻る必要がある。なぜおもしろ見つけや丸ごと読みは子どもをひきつけるのか。教師がしやすいではなく、子どもにとっての魅力は何か。それは読みをつくるということ。先生の発問に答えるでは、読みを作るは弱い。答えるはできる。力を出しきって、読みを作る。表現や仕掛けが読み手に呼びかけている。それにかぶりついて読みをつくる。そして、交流する中で、反応できた、ここは弱かった、などを経て自分の反応がより精選されていく。そこがおもしろさ。今そうしたことに取り組んでいるが、何がよいのかは時に確認しておく必要がある。

説明文を今日は扱うが、教師自体がきちんと読みを作っておく必要がある。「鳥獣戯画を読む」とは、変わったタイトル。本当は鳥獣戯画を読んで、高畑さんが感動したことといったことが省略前のタイトルとなるは

ず、それを踏まえて読んでいくと、どんな反応ができるか。

気づき反応 高畑さんがこんなことを伝えようとしているよ に気づいてマークをつけて読む

つながり反応 上に絵があって、文章がある。つないで読むことができる。絵と言葉

文章をつないでいく反応。解説が入っている。兎と蛙のところなど、文章をつないでいくと

書き手反応 高畑さんを意識している。高畑さんは読み手をここで自分の世界へ連れ込もうとしている。といったところが書き手反応。

納得に対する反応（批判的な読み）

高畑さんのメッセージには納得できるかどうか。

そうした反応を使いながら教材研究をしていく。丸ごとよみの発想でいくと、書いた順番が非常に計算されている。最後に主張に落とし込んでいっている。構成もしっかり考えられている文章。

次の会では、具体的な段階での学習手順を話し合っていく。最終的には6年生で実践があってフィードバックできるようになっていけばよいと考えている。

○田中先生

天気を予想するもその流れの中にある。筆者の経歴なしには読めない。時期的にいうと PISA の学力の話題の中で改訂されてきた教科書。

大学の講義で、同時期の教材を比較するとその時期にしないといけないことが見えてくる。同じ教材が版が変わるごとに変わってきているところを見つけると、何をしないといけないか分かる。比較する中で見えてくるものがある。

単独で見えていくと、文章構成図を作ろうとすると、段落と段落をつなぐ言葉にひっかかることができる。そこをどう取り上げていくか。

批判的思考については、大学生も教材文を見て、すばらしいところを見つけることができる。相対的に評価できないとすばらしいとはいえない。そうすると、問題点も出てくる。目的に合致していればすばらしい。合致していなければ、それはそれでもいいと見ればいいが、なかなかそういう見方ができない。

教材の問題点がクローズアップされてきていたが、問題点があっても素晴らしいとなることもある。批判的思考は非難ではない。

学び合いについて考えることが多いが、学び合いによって、学習者が発見をして、それによって学びが成立する。かつて所属した野池先生の勉強会で、8年間指導を受けて唯一誉められたかもしれないことは、司会をして、予定通りにいかなかった話し合い。予定通りに終わる話し合いは話し合いではないかもしれない。儀式。司会すら予定していなかった展開を見せていくのがいい話し合い。自分が想定していたものではない状況で話し合いを仕組んでいくことが学び合いでは大切ではないかと思っている。

○磯野先生（西小学校教頭）

おもしろ見つけを見せてもらおう。その時に思うこと。模造紙に全文があって教師が書いていくが、それが子どもの読みを表したものになってない。子どもが出した言葉が本当はもっと深くつながったりからまっていないと、子どもの直観に沿ったものにならない。それができていないために、切り込みになっていかない。板書を工夫して構造化していかないといけない。

教材研究（15分）

小川先生が提示した反応例を一つの視点として、どんな直観が出てくるかということを考えていく。

すごい、カッコいいといった情緒的な反応も当然あるので、入れていく。

○赤木先生より

批判につながるところで考えたこと。6年生が読むということを想定したとき、最初にどう思うか、見る機会も多いが、子どもはすごい興味をもって読む。内容や書きぶりが新鮮で引き込まれる。一方で今までの読み方が使えない。子どもによっては、これって説明文？となる。説明文というと、問いと答え、つなぐ言葉、文末表現、文章構成などでやっぱりと納得しながら読む、ということが多い。教材が変わってきている。低学年は定番があって自然、生き物のすばらしさ、かしこさで収まっているが、それとは違ったタイプ。子どもも今までとはちがう、方策が使えないと思いながら、興味深い語りや挿絵とつなぎながら読んで、おもしろいところまでは保障されている。そこからどうするか。最終的には、問いと答えが明らかになっているわけではないが、人類の宝だと言い切るまでにどんな手順で作戦で納得させようとしているか、キーワードが「漫画の祖」「古い時代のものだ」、最後の段落の、「のびのび」や「自由闊達」、2段落ではのびのびとか気品とかを使いながら、人類の宝だと言っているのとらえていけるように仕込んでいかなければならない。高畑さんなりの書きぶり、1段落がすごい。読み手を引き込む。あとはどんどん引き込まれていく。一気に読める。ということはどういうところからとらえられるか。子どもがどうとらえて、いくかを授業として考えていく。一方で、へえとかそうなんだという読み方とは位置づけにくい気づき反応といったものがきちんともてたことも評価していくことがおもしろ見つけの原点。先生から問われてしかたなく感想をいっているのではなくて、自分が思った感想を評価してもらえることが、6年生とは言え、意味のあることになるのではないかと。

グループ協議

○小寺先生グループ

鳥獣戯画の作品が意図的に口語体で書かれている。子どもたちは知りたいと思う。日本のアニメ界をひっぱっている高畑さんだから言える素晴らしさが書かれていて、子どもたちはそれを見つけていくことができる。アニメは見る、漫画は読む、というところから投げかけも出来る。文章の中に出てくる、どうだい、いったいなんだろう、などと強調する書き方、高畑さんの反応にも思える。立ち止まって欲しい言葉にあふれている。いろいろな言葉にかかわって文章全体を読み深められていけるようにした。鳥獣戯画のことだけなら、7段落まででいいが、8、9で子どもたちに伝えたいことを（日本文化の誇りなど）を伝えたいということになっている。

○小野先生グループ

1段落では、書き出しのところ、実況中継のように始まっている、2段落は観察力を生かした分析、3段落は鳥獣戯画の情報の付け加え、4段落ストーリーの説明、5段落、絵の説明、8段落歴史的背景、9段落、情報の整理の上で文化的価値、とそれにかかわる人々のすばらしさ。情報が多いので、整理していくのが難しい。すごい、おもしろい、で読んで、人類の宝となったときに、最初に戻って本当に人類の宝かで読んでいくことができる。

○平島先生グループ

読者の興味をひく文章になっている。1～7段落。いろんな仕組みがある。書き手反応、書きぶりにいくことが多い。全体を説明して詳細を一般化。リズムよく読むことができる。絵とつなぐこともできる。人類の宝は言いすぎかも。最初に高畑さんを出しておいたら、高畑さんの主張に目が向くのではないかと。

○采女先生グループ

1段落目

絵を解説している。具体的に結びつけて、

2段落

短い文体、体言止め、高畑さんお感じ方と具体的な絵の解説が結び付けられていて納得できる。

3段落

漫画の祖。兎と蛙の大きさがちがう。フィクション。おもしろくておかしい。漫画の祖が納得できるかどうか。

4段落

アニメの祖。動きとか時間とかと結び付けられるかどうか。長い時間を連続して書く。ということでアニメの祖ということが納得できるかどうかで読める。

5段落

視点を近くして読んでいくことができる。漫画の祖というキーワードが別の視点から説明してある。より説得できるようにしてある。

6段落

3段落を別の視点からよりくわしく見ていっている。

たいしたものだ が高畑さんの評価を表している。すごさや高畑さんの感動がつながって説得力がある。つなぎ反応がとても大切なので、きちんとつないでいかないといけない。教師がつないで

7段落

4段落のアニメの祖をちがう視点からより説得している。3と5、6それから4と7でつないで気づき反応ができる。

○正木友則先生（IPU）

「画」であるのに「読む」となっているところは注目店。漫画、アニメの祖ということから、筆者の反応そのものが出ている。

2段落の描写、光村図書の中学校教科書掲載の「最後の晩餐を知っているか」に似ていて、筆者が強く出て、読者をいざなっていくような文章になっている。

鳥獣戯画を読むというタイトルだとしたら、7段落までで終わる、そうなってくるとその後の文章はどうなるのか、おどろきですてきなものって何だろうとなって、人類が残してきたということの素晴らしさ、タイトルが人類の宝、鳥獣戯画を読むというようなことが出てくると、しかけにのって読んでいくことができる。

何と素敵でおどろくべきことだろう、千年の釘と同じで、情意面で筆者が出てくるところが似ているところ。高畑さんは、だから人類が素晴らしいということにもなる。

○小川先生

4つの反応を窓口にしていくと、教材研究の仕方が見えてくる。マニュアルにしてはだめ。感動も生まれにくい。次のステップも生まれにくい。

漫画の祖、アニメの祖に力を入れて読んでいた。そうではない。読みがゆれている。正木先生の話とダブル。9段落に楽しく、とびきりモダンな、実に自然でのびのび、自由闊達、ルネッサンスの頃の絵が浮かんだ。西洋のものの捉え方に対して、日本のいきいきとした。それを伝えたいのではないか。読みということは、自分の関心や経験によって軸足の置き所が変わってくる。見方が豊かになっていく随筆につながっていく。

いろんな反応が出てきていろんな読みが成立したことがよかった。

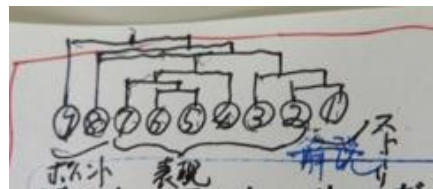
○田中先生

私も読みが固まっていない。今日時点での話。

文章構造図

No213 小学校の国語を語る会

この文章は、画についての観察と解釈。それから見解が述べられている文章。①はストーリー駆動。②～⑦表現駆動。②、③漫画の祖。④～⑦はアニメの祖でくくれる。と現在のところは考えている。



観察→解釈→位置づけ が大きな流れ。観察では根拠を示していて、解釈の部分で理由付けが行われ、位置づけで主張ができるのではないかな。観察、根拠で共感、解釈、理由付けで納得、位置づけ、主張でもう一度共感という読者の読みになる。

批判的思考

1段階で「他に見えるものはないか」 2段階で「別の解釈は」 3段階で、「別の主張は」ということが持ち込める。批判的思考とう視点で見えていくところのようにとらえることができる。

次回 7月26日 授業構想を行う